

## ジョン・ティロットソンの火薬陰謀事件記念説教 — 「ルカ伝 9 章55-56節」とカトリック教批判 —

高橋正平

### 序

1678年11月5日、カンタベリー首席司祭、陛下直属司祭ジョン・ティロットソン (John Tillotson) は下院で説教を行った。それは1605年のジェズイットによるジェームズ一世殺害をねらった国会爆破未遂事件を記念した説教の一環をなすものであった。1678年と言えば事件から73年が経過し、事件そのものが風化しつつあったが、17世紀後半の代表的な詩人であるドライデン (John Dryden)<sup>①</sup>も激賞したティロットソンによる火薬陰謀事件記念説教は聴衆の関心を引くに十分であった。説教自体はそれまでの説教同様、事件の首謀者ジェズイットの属するカトリック教会批判、イギリス賞賛の説教である。それだけならば格別ここで取りあげる必要はない。しかし、ティロットソンが説教を行った1678年にイギリスの歴史上興味深い「カトリック教徒陰謀事件」が起こっていることを考えると、ティロットソンの説教は特別な意味を帯びてくる。「カトリック教徒陰謀事件」はジェズイットによる国王チャールズ二世暗殺計画であった。チャールズ二世を殺害して王の弟であるカトリック教徒のヨーク公 (後のジェームズ二世) を王に即位させ、イギリスのカトリック教化を画策したカトリック教徒の陰謀であった。しかもルイ14世の援護を得たヨーク公がこの事件に一枚絡んでいたという噂も流れていた。この陰謀は結局事件を告発したタイタス・オーツ (Titus Oats)<sup>②</sup>のねつ造であることが判明したが、この事件がイギリス社会に与えた影響は大きかった。イギリス国民は以後1681まで3年間、混乱と恐怖に陥り、35名の無実のカトリック教徒が処刑された。現国王の暗殺、しかもそれがジェズイットによる計画と聞けば誰も1605年のジェズイットによる国会爆破によるジェームズ一世殺害計画を思い出したに違いない。ジェズイットが再び王の殺害を狙う、これはイギリス国民にジェズイットひいてはカトリック教会への敵意、不信感を一気に煽り立てた。1670年代にカトリック大国フランスは侵略戦争において次々と成功を収め、ヨーロッパにおいて大国の地位を築いていた。そのフランスに一時亡命していたチャールズ二世は帰国後の1662年及び1672年に「信仰寛容宣言」を出し、国内のカトリック教徒保護に乗り出した。カトリック教徒寄りの政策によりチャールズ二世はカトリック教徒ではないかとの噂が流れていた。(死の直前に自身はカトリック教徒であることを告白した。) このような状況下でティロットソンが記念説教を行うことはかなり勇気のいることであったと思われる。ティロットソンには事件の首謀者ジェズイットひいてはカトリック教会を批判することが求められていたが、「陛下直属司祭」であるティロットソンはカトリック教寄りのチャールズ二世を考えるとカトリック教批判も自由にはできなかつたのではないかと考えられる。しかし、チャールズ二世殺害計画の噂が発覚し、国内の反カトリック教が一気に加熱したことはティロットソンにとって火薬陰謀事件説教を行う絶好の好機到来であった。このような背

景の下でティロットソンは1678年11月5日、下院で記念説教を行った。説教の目的は言うまでもなく1605年の火薬陰謀事件を引き起こしたジェズイット及びカトリック教会非難である。ティロットソンはカトリック教寄りのチャールズ二世の下、1678年王暗殺計画が巷に流れる中で下院で火薬陰謀事件記念説教を行った。チャールズ二世48歳、王位について18年目の年であった。ちなみにティロットソンもチャールズ二世と同じ1630年生まれで、説教時48歳であった。以下ティロットソンの火薬陰謀事件記念説教におけるティロットソンのカトリック教批判を中心に論を進めていきたい。

## 1. ティロットソンの「ルカ伝」9章55-56節解釈

ティロットソンが説教の題材としてあげたのは以下の「ルカ伝」9章55-56節である。

But he [Jesus] turned about and rebuked them [James and John], and said, ye know not of what spirit ye are. For the Son of Man is not come to destroy men's lives, but to save them.

この一節の前の54節には、イエスに宿泊を拒んだサマリア人を焼却することをイエスに提案する二人の弟子ヤコブとヨハネの次の言葉が記されている。

And when His disciples James and John saw it [the Samaritans' not welcoming Jesus], they said, Lord, wilt Thou that we command that fire come down from Heaven, and consume them [the Samaritans], even as Elias did?

9章54-56節は、救いの成就のためガリラヤからエルサレムへ向かう途上のイエスがサマリア人に宿泊を求めたところ彼らから拒否され、怒った弟子のヤコブとヨハネがサマリアの町を天から火を呼び集めて焼却することをキリストに提案する一節である。イエスは彼らを振り返り、彼らを叱責する。なぜかと言えば「人の子」イエスは人々の命を滅ぼすためではなく、救うためにこの世に生まれたからである。救世主イエスの弟子たるヤコブとヨハネも当然師のイエスと同じ考えを持つべきで、いやしくも人を滅ぼすために彼らはイエスの弟子になっているのではない。むしろイエス同様人の命を救うのが彼らの使命である。敵への愛を示すイエスと敵への死を願う弟子達との相違がここに描かれている。ティロットソンがなぜ54節を省略し、55-56節だけを説教の冒頭に書いたのかその真意はわからないが、説教では54節も扱われている。55-56節は、救世主イエスと破壊者ヤコブとヨハネとの対比から、イエスの敵への愛を特に強調する。ティロットソンの説教の意図は明白である。カトリック教に対するイギリス国教会の優位をティロットソンは終始説いている。説教の随所でティロットソンはカトリック教を批判するが、絶えずイギリス国教会と異なりキリスト教の正道から逸脱したカトリック教がティロットソンの念頭にはある。ティロットソンにとってサマリア人焼却をめぐるイエスと弟子のヤコブとヨハネの見解の相違はカトリック教批判の格好のエピソードとなる。ティロットソンは次のように言う。

The Miracles of it [the Christian Religion] are the great external evidence and

confirmation of its truth and Divinity; but the morality of its Doctrines and Precepts, so agreeable to the best Reason, and wisest apprehensions of mankind, so admirably fitted for the perfecting of our natures, and the sweetening of the spirits and tempers of men, so friendly to human Society, and every way so well calculated for the peace and order of the world.<sup>③</sup>

ティロットソンはキリスト教の奇跡がキリスト教の真理と神聖の外的証拠であり承認であると言っているが、彼は概してカトリック教の奇跡には否定的な見方をしている<sup>④</sup>。ティロットソンは、むしろ奇跡よりもキリスト教の道徳性が理性に一致しており、人間性を完成させ、精神を穏和にし、人間社会に役立ち、世界の平和・秩序に適していると言うが、ティロットソンがここで言うキリスト教はカトリック教ではなくイギリス国教会である。カトリック教は人々をむしろ誤った道へ誘い、彼らの宗教が人々を真のキリスト教徒を生み出すとは考えられない。火薬陰謀事件を引き起こしたカトリック教には「非キリスト教的精神と誤った熱意」<sup>⑤</sup>が見られ、その精神と熱意こそが事件の騒乱と混乱の元凶なのである。ティロットソンからすればイギリス国教会こそが真のキリスト教であり、事件に関わったカトリック教会が真のキリスト教とは言えない。ティロットソンが「ルカ伝」9章55-56節を説教で取りあげた理由は明らかである。「ルカ伝」のイエス一行とサマリア人との対立をティロットソンは「宗教の違い」<sup>⑥</sup>と見る。サマリア人は「異教徒」で「教会分論者」であるがゆえに、二人の弟子はサマリア焼却の許可をイエスに求める。しかしイエスから見れば弟子の行動はイエスにはふさわしくない。なぜか。それは人の命を滅ぼすためではなく救うためにこの世に生まれたイエスの弟子たる者はイエスと同じ考えでなければならぬとイエスは考えているからである。それは「激しい迫害する破壊的精神」ではなく、「穏やかな優しい人を救う精神」であり、「人の生命と関心、及び我々の最大の敵にすら優しい」<sup>⑦</sup>精神である。一言で言えばイエスの「隣人愛」と「汝の敵を愛せよ」の精神である。だからヤコブとヨハネは「激しい不快な律法の制度」<sup>⑧</sup>ではなく、むしろ「穏やかな平和な福音の制度」の下にあるべきなのである。旧約のエリアの「律法」ではなくイエスの「福音」にこそヤコブとヨハネは依拠すべきなのである。福音は「普遍的な愛と平和と善意」をこの世にもたらし、神とイエスに対する熱意がいかに大きくとも弟子達の「熱情的な、激しい、復讐的な人を絶滅する精神」<sup>⑨</sup>は正当化されない。イエスの弟子が取るべき精神はイエスと同じ敵をも愛する精神である。イエスのこの世への到来の目的についてティロットソンは次のように言う。

He [Jesus] came to discountenance all fierceness and rage and cruelty in men, one towards another; to restrain and subdue that furious and unpeaceable Spirit, which is so troublesome to the world, and the cause of so many mischiefs and disorders in it: And to introduce a Religion which consults not only the eternal Salvation of mens souls, but their temporal peace and security, their comfort and happiness in the world.<sup>⑩</sup>

イエスは、人の獰猛さ、激怒、残虐さを嫌い、平和を乱す獰猛な精神を静め、人の魂の永遠の救済だけでなくこの世における魂の平穏と安全、平安と幸福を考える宗教を広める

ために生まれたのである。サマリア人焼却をイエスに提案するヤコブとヨハネの行動はイエスの現世における使命とは著しくかけ離れている。イエスからすれば自分をを冷遇するサマリア人に対してすら寛大な態度を示したかったが、ヤコブとヨハネは神と等しい存在であるイエスに対するサマリア人の無視に耐えられず、神のみわざ成就のためにエルサレムへ行く途中のイエスに対するサマリア人の冷遇には神の裁きが当然と考える。敵への愛と敵への復讐、これがイエスとヤコブとヨハネの違いである。イエスとサマリア人との間には宗教の違いから生ずる敵対心があったし、またイエスとヤコブとヨハネの間にもサマリア人についての見解の相違があった。ティロットソンの「ルカ伝」9章55-56節解釈にこれまでの解釈と著しく異なる点はない。同じ「ルカ伝」9章55-56節を説教の題材としたアンドルーズもヤコブとヨハネの行動は「無知」による行動であると言った<sup>99</sup>。ティロットソンもイエスと弟子の違いは弟子の「無知」によって生じたと言う<sup>100</sup>。イエス登場はエリア的復讐心を克服した。「眼には眼を」的なエリア精神と異なるイエスの愛の精神に新約聖書の大きな意義があった。「ルカ伝」9章55-56節を基に展開するティロットソンの説教は、イエスとヤコブとヨハネのサマリア人への取り扱いの相違についての解釈から始まる。イエスによる弟子への叱責は弟子達が固執するエリアをいかにして「愛」によって克服するかを物語り、それはまた、敵への「愛」が敵への「復讐」に打ち勝つ様子を描いている。これはまた火薬陰謀事件へのティロットソンの基本的な姿勢を示すことになる。

## 2. ティロットソンのヤコブ・ヨハネ批判とカトリック教批判

ティロットソンは、サマリア人へのヤコブとヨハネの態度はイエスの説く愛の精神とは無縁のもであることを強調する。ティロットソンが説教で最も強調したかったことは弟子達の行動がいかにキリスト教精神と反しているかである。サマリア人焼却は福音の基本的な教えと真っ向から対立する。福音は何を我々に命じているか。それは「お互いを、全ての人を、敵さえも愛する」ことである。我々を憎む人々を迫害することを福音は許しはしない。

They [the main and fundamental precepts of the Gospel] require us, to be merciful, as our Father which is in Heaven is merciful; to be kind and tender-hearted, forbearing one another, and forgiving one another, if any man have a quarrel against any, even as God for Christ's sake hath forgiven us: And to put on, as the elect of God, bowels of mercy, meekness and long-suffering, and to follow peace with all men, and so shew all meekness to all men:<sup>101</sup>

イエスの福音は慈悲、やさしさ、従順、長期の忍耐、平和を我々に要求する。これと相対立するのは「非人間的な残虐、迫害、陰謀、虐殺、残酷な宗教裁判、我々と異なるすべてを根絶する神聖同盟」である<sup>102</sup>。ヤコブとヨハネの精神はキリスト教、救世主、原始キリスト教徒のお手本・模範とも相対立する。救世主は「平和の王子」<sup>103</sup>であり、天国と現世において平和を作り、人を神に和解させ、争いを解決し、この世のあらゆる敵意を消滅させ、考え方や気質の異なる人たちを合意させ、平和な振る舞いへと導くのである。彼によってこの世にあった残虐な破壊的精神はすべてのキリスト教社会からは追放される。救世主に対する預言はイエス誕生とともに実現される。それゆえイエスは優しく、平和を愛し、従

順と人間愛で満ちている。人間を救うために生まれたイエスは人間への愛を示す。従ってイエスは怒り狂う熱意とか宗教的な激怒を示すことはしない<sup>97</sup>。このようにティロットソンはイエスの現世における使命が何であるかを述べ、イエスの根本的な教えが人間愛であることを繰り返し述べる。ティロットソンによるイエスの人間像、イエスの教義の詳述の意図はいかにヤコブとヨハネのサマリア人焼却提案がイエスの教えに真っ向から相対立するものであるかを際立たせることなのである。イエスがヤコブとヨハネを叱責したのも彼らのサマリア人への憎しみがイエスの教えと真っ向から対立したからである。イエスとしてはヤコブとヨハネにもサマリア人へやさしい愛の手を差し出し、サマリア人を許す寛大な態度を示してほしかった。それがイエスの弟子としては当然取るべき態度だった。しかし自分の弟子であるにもかかわらず、ヤコブとヨハネはイエスの教えを無視する態度を示した。だからイエスは「きみたちはどのような精神を持ち合わせているか知らないのだ」と弟子を叱責するのである。ティロットソンの「ルカ伝」9章55-56節解釈から我々はティロットソンのイエスのヤコブとヨハネへの叱責の理由を知るに至る。「ルカ伝」9章55-56節のイエスとサマリア人との関係にはイエスの思想の核心が述べられている。いかに宗教が異なろうとも他者への敵対的行為は許されない。宗教が異なっていればこそなおさら一層両者は互いに寛容な態度で接すべきなのである。イエスが説くのはまさに他者への寛容である。他者への寛容、愛こそが人類共存の礎であることをイエスはヤコブとヨハネを通してあらゆる宗派の人に訴えているのである。

イエスを拒否したサマリア人は異教徒であり教会分離主義者であり、サマリア人がイエスや神、イエスの宗教、それにエルサレムを侮辱したがゆえにヤコブとヨハネが彼らを焼却することをイエスに要求したが、神や宗教への熱意の口実があってもヤコブとヨハネの精神は正当化できない。その復讐の精神はヤコブとヨハネがどのような精神を身にまとっているかを知らないが故の要求である。なぜかといえば「人の子イエスは人の命を滅ぼすためではなく、救うためにこの世に生まれた」からである。ヤコブとヨハネのサマリア人焼却要求はイエスの意図と救世主としてのイエスのこの世への到来の目的とは完全に矛盾する<sup>98</sup>。ヤコブとヨハネは、自らの行動がイエスに対する愛情、宗教への強い思いから出ていると考えているとしても、それはイエスからは認められない。既に触れたように、ヤコブとヨハネがイエスの教えを理解していれば、彼らはサマリア人焼却提案をイエスに行うことはしなかった。一見すればヤコブとヨハネの行為はイエスへの愛情から発しているから許されるべきであるとも考えられるが、ヤコブとヨハネの提案はイエスの教えとは相容れないために決して許すことはできない。もしヤコブとヨハネの提案を受け入れればそれはイエスの矛盾した姿を示すことになる。ヤコブとヨハネがサマリア人への復讐を意図したようにカトリック教会も「真実」への熱意から、神やキリストの栄光、真のキリスト教のために反対者へは厳しい迫害と残虐な処罰を課してきている。カトリック教のこの精神を見せているのがヤコブとヨハネである。カトリック教会は、教会が迫害する人々は異教徒であり教会分離主義者であることを確信しており、そのような罪人にはいかなる罰も大きすぎることはないことを確信している。ヤコブとヨハネもサマリア人についてはカトリック教会同様確信している。カトリック教会もヤコブとヨハネも同様に厳しい処罰の対象は自らの宗教と異なる者への処罰であり、その処罰は正当なものであることを確信している。これは意見を異にする者への理解を拒絶し、自らの意見のみが絶対的に正しいという一方

的な見解である。カトリック教会もヤコブとヨハネも一方的に他者の信仰を無視し、自らのみが正しく、他者の存在を認めない独断的な態度を取る。その態度へティロットソンは批判を向ける。ただカトリック教会とヤコブとヨハネの違いは、カトリック教会は自らの行動についてはすべてを知っていたうえでの行動であったのに反し、ヤコブとヨハネの場合、彼らは自らがいかなる人であるかについては「無知」であったことである。だからイエスは、サマリア人焼却の許可を求めるヤコブとヨハネについて「君たちはいかなる精神を身につけているか知らない」と彼らを叱責するのである。ヤコブとヨハネのサマリア人への復讐心は彼らがユダヤ教で育てられたがゆえであり、そのために敵に対しヤコブとヨハネはエリアを前例として挙げ、ユダヤ的な復讐心をサマリア人に示したのである。ユダヤ教で育てられたヤコブとヨハネは未だキリスト教の学習者であり、キリスト教を完全には教えられていなかった。しかしカトリック教の場合、彼らの敵対者への迫害が無知であると言えればそれはむしろ意図的なみせかけであり、許されるべき性質のものではない。なぜかといえばカトリック教会が信奉するキリスト教は真のキリスト教と相反することを教えているからである。キリスト教徒が信仰箇条について誤った考えを有している人を殺すべきではないというのはキリストが罪人のために死んだのと同じく新約聖書では明白なことである<sup>99</sup>。イエスがヤコブとヨハネを叱責する理由は、彼らの怒り狂った破壊的精神がキリスト教の人間愛と善に反するからである。「ルカ伝」9章55-56節におけるヤコブとヨハネのサマリア人焼却はイエスの弟子としてはあるまじき行為で、それは彼らが育ったユダヤ教的精神がまだ身に付いているからである。「目には目を」的な復讐心を是認するモーゼとエリアの時代ではサマリア人焼却は許されよう。しかし、人間愛・隣人愛をその教えとするイエスの時代にあってはヤコブとヨハネの行為は決して受け入れられない。ティロットソンの論点は、しかし、単にヤコブとヨハネを叱責することではない。ヤコブとヨハネの行為がカトリック教徒といかなる点において関連性を有しているかを指摘することがティロットソンの最大の論点である。ヤコブとヨハネのサマリア人焼却はカトリック教徒批判のための格好のエピソードにすぎない。ティロットソンは、ヤコブとヨハネのサマリア人焼却提案以上にはるかに悪い精神があるという<sup>100</sup>。その精神はキリスト教に反するだけでなく自然宗教の信条にも反し、人間であることにも反しさえする。「ヤコブとヨハネよりも更に悪い精神」とは何か。ティロットソンは次のように言う。

...Which [a much worse spirit than James and John's] by falshood and perfidiousness, by secret plots and conspiracies, or by open sedition and rebellion, by an Inquisition or a Massacre; by deposing and killing Kings, by fire and sword, by the ruine of their Country, and betraying it into the hand of Forreigners; and, in a word, by dessolving all the bonds of humane Society, and subverting the peace and order of the World, that is, by all the wicked ways imaginable doth incite men to promote and advance their religion.<sup>101</sup>

「ヤコブとヨハネよりも遙かに悪い精神が虚偽と裏切り、秘密計画と陰謀、暴動、反乱、宗教裁判、虐殺、王廃位、王殺し、王国破壊、王国の外国人への引き渡し、人間社会の結束の解消、世界の平和と秩序の破壊、考えうるあらゆる悪しき方法によって人々を扇動し自分たちの宗教を促進させている」とティロットソンは述べるが、「ヤコブとヨハネよりも

はるかに悪い精神」が何を指しているかは明らかである。火薬陰謀事件計画者のカトリック教徒は「ヤコブとヨハネよりはるかに悪い精神」を有する人物である。彼らはありとあらゆる悪の限りをつくし、自派の拡大を狙う。社会の混乱にまぎれて国を奪い、王を殺害する人間の敵である。それが火薬陰謀事件計画者の紛れもない正体であることをティロットソンは示唆する。カトリック教徒は世界は自分達のために作られ、自分たち以外に人間はいないとおごりで固まっている。そしてキリスト教徒が崇拝する神が平和の神ではなく混乱の神であるかのごとき誤った考えにとりつかれている。すなわち彼らは「彼らよりも正しく純真な人たちへの拷問を發明し、拷問を命じる者」なのである<sup>90</sup>。彼らは神と宗教を誤って表すことにより神と宗教から威厳と栄光を奪っている。このようなカトリック教徒の考えは神の本質の正しい理解にかけては異教徒よりも劣る。異教徒は宗教を人間社会のきづなと考え、人々の真実、忠節、正義の基盤と見なしている。異教徒のほうがはるかにカトリック教徒よりも正しい生き方を示しているとさえティロットソンは言う。宗教が本来の宗教の使命から逸脱するときには宗教はその特質を失い、宗教であることを止めてしまう。

...when it [religion] serves to no other purpose, but to be a bond of conspiracy, to inflame the tempers of men to a greater fierceness, and to set a keener edge upon their spirits, and to make them ten *timesd more the children of wrath* and cruelty than *they were by nature*, then surely it loses its nature and ceases to be *Religion*:<sup>91</sup>

では真の宗教は何をなすべきなのか。それは「人々の作法と人間性を改め、人間への暴力、残忍性、虚偽、裏切り、暴動、反乱を止めさせる」<sup>92</sup>ことである。ところが「ヤコブとヨハネよりも更に悪い精神」カトリック教はこれとは逆に「激しい激怒」を人々に吹き込み、暴力を犯させ、絶えず政府に取って代わろうとし、人々の幸福を損ねている。カトリック教はあらゆる宗教の本質と目的に反する手段によりカトリック教を普及し、促進するように人々に教えている。ティロットソンはいかにカトリック教会が真の宗教からかけ離れているかを幾度となく繰り返す。ティロットソンからすればカトリック教は人々に幸福をもたらすことはなく、国家を混乱に陥れ、その間に自らの勢力を拡大することを狙う邪宗である。かくしてカトリック教は思いのままに人々を操り、彼らはカトリック教が真の宗教と認め、異教徒を根絶し、王廃位や政府転覆の正当性の教義がカトリック教の真の教義と認めてしまう。しかし、このような宗教は「不信心」や「無宗教」よりも悪く、真の宗教ではありえず、神に由来しているはずがない。カトリック教の国家への反逆や反乱は異教哲学には見あたらず、異教哲学は自国を裏切ってまでも要人の暗殺・虐殺を容認していることもない。ティロットソンは徹底してカトリック教とりわけ過激なジェズイットの反宗教性、残虐性をやり玉に挙げる。ティロットソンの意図は明白である。それは、ジェズイットの過激性を指摘し、彼らの盲目的な目的のためには手段を選ばぬ悪辣ぶりを暴き、彼らの正体を聴衆に訴えることである。ティロットソンはとりもなおさず火薬陰謀事件計画により国王ジェームズ一世の殺害を狙ったジェズイットの凶暴ぶりについて述べる。国王を殺害し、国家を混乱に陥れ、社会の秩序を乱し、人々に不安をもたらすことがジェズイットの狙いである。国家が国家として安定を維持するために宗教が果たす役割は

大きい。しかしカトリック教は国家の秩序を守るところか、逆に国家を無秩序に陥れ、民衆を混乱に陥れる。ティロットソンからすれば社会の秩序を守るのは王と宗教である<sup>99</sup>。ティロットソンは、この両輪があってこそ国家は国家としての機能を果たすと考える。ところが火薬陰謀事件の首謀者はこの両輪の分断を謀り、王を殺害し、王への国民の服従を赦免し（この二つはカトリック教会の「革新」である。）、宗教を彼らの目的の道具として使用し、ジェズイット王国樹立を目指す。カンタベリー首席司祭としてのティロットソンは元々はピューリタンの家系に生まれ、イギリス国教会に転ずるが、彼の反カトリック教への姿勢は一貫している。Lockeは、ティロットソンの説教には反カトリックが点在していると言っている<sup>100</sup>。ティロットソンの反カトリック的姿勢は例えば1684年の *Discourse of Transubstantiation* にも見られ、それ以前にも1666年に *The Rule of Faith* を出版し、彼のカトリック教への批判は教皇や宗教会議の権威や伝統に向けられている<sup>101</sup>。しかしそれ以上にティロットソンがカトリック教を嫌う点はカトリック教が本来の宗教に止まることをしないで政治にまで足を踏み入れるようになってしまったことである。その端的な表れが王殺しや王への服従赦免であった。イギリス国教会とカトリック教を比較してティロットソンは次のように言っている。「我々は、宗教問題においてはキリスト教の真の古い規則、聖書に含まれる神の言葉によって我々の信仰や慣例を決定する。」それに反し、「カトリック教会は教父、宗教会議、教皇によって決定する。」<sup>102</sup> 真のキリスト教から逸脱したカトリック教についてこのようにティロットソンは批判する。更にティロットソンはカトリック教会の異教徒根絶と比べ、イギリス国教会は異教徒や無信仰者との約束をやぶることや、国教会と異なる人を火と刀で破壊し、根絶したりすることを教えないとも言っている<sup>103</sup>。ティロットソンが火薬陰謀事件説教で批判したヤコブとヨハネはティロットソンがそれまで批判してきたカトリック教徒を思わせるのに十分な人物である。ヤコブとヨハネはイエスと異なる考えに取りつかれ、イエスとは真っ向から対立したが、彼らの行動基盤は異教徒根絶、権威なのである。ヤコブとヨハネはいわばカトリック教徒の腐敗・墮落そのものを象徴していると言ってもよい。

ティロットソンの説教は事件が神の慈悲深い摂理によって発覚されたことへの神への感謝で終わる。これは火薬陰謀事件記念説教のお決まりの終わり方である。更に事件の首謀者の一人である Sir Everard Digby を名指しで非難の的にあげ、ジェームズ一世殺害という歴史に類を見ない大事件を計画したにもかかわらず、Digby は事件については全く反省の態度をみせず、逆に事件が未遂に終わったことを残念がっていると Digby の非情さに言及する。Digby の事件後の態度はそのままカトリック教会のイギリス国王及び国家への軽視の態度を示しており、Digby を見ただけでもカトリック教会の実態が十分に理解できる。Digby が代表するカトリック教会は人間から「あらゆる人間性」を奪い、人間の優しい穏やかな性質を「オオカミとトラ」に変える。更にティロットソンは教皇を「反キリスト」と呼び、ジェズイットが計画した火薬陰謀事件よりも悪辣な邪悪なことが反キリストには可能であるのかと疑問を投げかけ、反キリストですらジェズイットの悪事を超えることはできないことを示唆する<sup>104</sup>。ティロットソンの火薬陰謀事件計画者及びその背後に存在するカトリック教会に対する批判・不信は以下の引用でも明らかである。

But I must charge their [Catholics'] Doctrines and Principles with them; I must charge the



*Heads of their Church, and the prevalent teaching and governing part of it, who are usually the contrivers and abettors, the executioners and applauders of these cursed Designs.*<sup>60</sup>

カトリック教会の教義や主義、カトリック教会の長、広く流布しているカトリック教の教えと国家への干渉批判は既にティロットソンが取りあげている点であるが、ここでもティロットソンは同じようにカトリック教の国王や国家への反逆精神、教会の教えと政治への干渉に関して苦言を呈し、カトリック教会の長たる者は火薬陰謀事件をたくらみ、扇動し、実行し、褒め称えているとさえ言う。火薬陰謀事件計画者は「盲目的な熱意と誤り導かれた良心の激怒」<sup>61</sup>に捕らわれている。事件の計画者は初めから残忍で残虐な性質ではなく、彼らの宗教が彼らをそのような凶暴な人間に変えてしまった。真の宗教とはこの世で最善であるばかりでなく最善の組織体でもあるのだが、それが善良な人間姓から逸脱し、残虐・残酷へと向かえば真の宗教は墮落してしまうとティロットソンは言う。その格好の見本がカトリック教で、カトリック教はまさしく真のキリスト教から逸脱したと宗教である。その逸脱はまた、「ルカ伝」のヤコブとヨハネのイエスからの逸脱でもある。

### 3. 「ルカ伝」 9章55-56節と火薬陰謀事件とチャールズ二世

ティロットソンは、「ルカ伝」9章55-56節解釈でイエスによって叱責された弟子のヤコブとヨハネの「非キリスト教的精神」と同じ精神を示す「あの教会」への警戒を促す。「あの教会」とは言うまでもなくカトリック教会である。つまり「ルカ伝」のヤコブとヨハネのサマリア人焼却精神は火薬陰謀事件を計画したジェズイットの精神と同じであるというのである。説教の最後でティロットソンは繰り返し、ヤコブとヨハネの考え方とカトリック教会の考えが同じであることを指摘し、それに反していかにイギリス国教会がキリスト教の真の姿を示しているかを強調する。火薬陰謀事件糾弾の記念説教という性格を考えると、ティロットソンのこの結論は極めて当然すぎる結論であると言わざるをえない。つまりティロットソンは「ルカ伝」9章55-56節を火薬陰謀事件へ適応するのである。聖書の事件への適応は火薬陰謀事件説教の定番である。しかしティロットソンは適応をはっきりとは行わない。「ルカ伝」でのイエス、ヤコブ・ヨハネ、サマリア人との関係は以下の三組が考えられる。

- (1) イエス対ヤコブ・ヨハネ
- (2) イエス対サマリア人
- (3) サマリア人対ヤコブ・ヨハネ

この三組の中でどれがもっとも適切に火薬陰謀事件へ適応されるか。国会爆破によるジェームズ一世殺害を考えると(3)の火薬陰謀事件への適応が最もうまくいく。ティロットソンの「ルカ伝」解釈を見ても、サマリア人→国会臨席のジェームズ一世や政府要人達、ヤコブとヨハネ→ジェズイット、という図式が出来上がってくる。ヤコブとヨハネのサマリア人への復讐精神は火薬陰謀事件を計画したカトリック教徒の精神と重なってくるからである。だがこの適応には無理が生じてくる。なぜかと言えばイエスを無視するサマリア人がジェームズ一世となるからである。(1)(2)は相手への殺害が含まれないから、事件への

適応はむづかしい。ただ(1)のイエス対ヤコブ・ヨハネの場合、ヤコブとヨハネの行動を叱責するイエスは火薬陰謀事件を非難するジェームズ一世となり、ヤコブとヨハネはジェズイットとなる。また、(2)のイエス対サマリア人の場合は、イエスを冷遇するサマリア人はジェズイット、冷遇されるイエスはジェームズ一世と考えることができる。いずれの場合にもジェームズ一世が中心的人物となる。このように「ルカ伝」9章55-56節の火薬陰謀事件への適応は簡単にはいかない。しかし、ティロットソンの「ルカ伝」におけるヤコブ・ヨハネとサマリア人との関係についての解釈から判断すると、ティロットソンは(3)のサマリア人へのヤコブとヨハネの行動を最も重視していると考えられよう。サマリア人とサマリア人を焼却するヤコブ・ヨハネの違いは、イギリス国教会とカトリック教会との違いである。ヤコブとヨハネの復讐精神は、火薬陰謀事件を引き起こしたジェズイットと相通ずるところがあるとティロットソンは言いたいのである。ヤコブとヨハネを叱責するイエスは敵をも愛する人物であり、それはジェームズ一世やイギリス国教会を指しているとも考えられる。実際には火薬陰謀事件後、事件関係者は処刑され、ジェームズ一世が事件関係者に恩赦を与えたことはなかった。にもかかわらず、ティロットソンは、イエスのような敵をも愛する精神はジェームズ一世やイギリス国教会にこそ具現化されていると考えている。イギリス国教会は「愛」、カトリック教会は「復讐」である。カトリック教会にとって異教徒は、信仰問題でカトリック教徒と異なる人を意味するのであるが、そのような異教徒は「火と刀」によって根絶されるべきだとカトリック教会は考える。異教徒根絶の他にカトリック教会は王廃位と王への服従からの王の臣民の免除を教義として掲げる。この教義は疑いもなくカトリック教会独自の教義で、宗教には無関係なカトリック教が独自に編み出したものである。それはティロットソンが強く異議を唱えている教義である。その教義が実践に移されたのが言うまでもなく火薬陰謀事件で、それは歴史上類を見ないほどの残虐な事件である。このようにティロットソンは「ルカ伝」を火薬陰謀事件に「適応」するが、その適応は単なる示唆に終始している。なぜティロットソンははっきりと「ルカ伝」9章55-56節を火薬陰謀事件に適応しなかったのか。ティロットソンは、火薬陰謀事件の残虐性を指摘し、カトリック教徒へ非難の矛先を向けてはいるが、「ルカ伝」の火薬陰謀事件への適応をはっきりとは行ってはいない。これは何を意味しているのか。私は、ティロットソンの「ルカ伝」9章55-56節の火薬陰謀事件への適応にはティロットソンの躊躇が見て取れると思う。これはたぶんティロットソンがチャールズ二世を意識した結果ではないかと考えられる。チャールズ二世は既に指摘したように、自身はカトリック教徒ではないと言っていたが、カトリック教には強い共鳴感があった。それは彼の様々な政策がカトリック教擁護を目的としていることから容易に理解できる。1662年の「礼拝統一法」審議中の議会に対してのカトリック教徒への不当差別の訴え、1670年のルイ14世との「ドーヴァーの密約」、1672年の「信仰自由宣言」によるカトリック教徒への罰則適用停止等はチャールズ二世の親カトリック教的姿勢を如実に示すものであった。ティロットソンは他の説教でもカトリック教批判の態度を表明しているので、火薬陰謀事件説教でのカトリック教批判はさほど我々を驚かしはしない。彼の反カトリック教は終始一貫したものであった。しかし、チャールズ二世を考えるとカトリック教批判は少なからずの危険を伴うことではなかったか。出版されたティロットソンの火薬陰謀事件説教時のティロットソンの肩書きは「カンタベリー主席司祭」「陛下直属司祭」であった。1691年にティロットソン

はカンタベリー大司教に昇任するが、その前にはチャールズ二世の心証をよくしておく必要があった。ティロットソンの説教は全体的には「柔らかい」し、彼の文体は時代を反映して非常に簡潔・明晰である。ティロットソンは、火薬陰謀事件説教においてカトリック教を批判しているのにも関わらず、総じてティロットソンは意図的にカトリック教への態度を和らげようとしているところがあることは否定できない。それはやはりチャールズ二世を意識してのことなのである。ティロットソンはヤコブとヨハネ批判によりカトリック教会批判を繰り返すが、それは他の火薬陰謀事件記念説教に共通して見られる批判である。その意味ではティロットソンのカトリック教批判に目新しいところはない。では、ティロットソンの説教で最も著しい特徴は何かと聞かれれば、それは敵であるカトリック教会への寛容な態度ということになる。Kenyon は、ティロットソンの火薬陰謀事件記念説教は「著しく穏やかな説教」であると言っているが<sup>99</sup>、ティロットソンの説教に感情的な露骨な憎悪はない。これまでの火薬陰謀事件記念説教では説教家は事件と類似する箇所を旧約や新約聖書から選び、それを火薬陰謀事件に適応し、事件を引き起こしたジェズイットへの批判を強めていた。ティロットソンのジェズイットへの態度もカトリック教会への態度も批判的な態度であるが、概して感情的な敵意を示すものではない。やはり、「穏やかな」ところがある。ジェズイットへの怒りから聴衆を感情的な復讐へと駆り立てたり、復讐心をぶちまけたりはしない。ましてやジェズイットに対して非キリスト教的な厳しい処罰を求めることもしない。ティロットソンはジェズイットの暴虐ぶりは暴虐として認めるが、だからといって彼はヤコブ・ヨハネのサマリア人への仕打ちのような感情任せの復讐心をジェズイットに対して抱きはしない。イギリス人はジェズイットようなことはしないし、宗教に反することを宗教のために行いはしない、とティロットソンは言う。イギリス国教徒の寛容な人間性とキリスト教徒の穏和な気質を特にティロットソンは強調する。イギリス国教徒はカトリック教徒と異なり、過激な行動に走り、国家を混乱に陥れるようなことはしない。たとえば Bonner [Edmund] 司教なる人物は Mary Stuart の女王即位後イギリスのカトリック教化に奔走し、イギリスのプロテスタントへの迫害は特に有名であったが、それでも政府は彼にイギリスでの平穏な人生を保証した。その他にも火薬陰謀事件発覚後ローマ側からの政府要人の暗殺が生じたりしたが、それでも政府は彼らに対しては寛大な対処を示してきた。いかなる暴力も無礼な振る舞いもカトリック教徒には示されなかった。だからカトリック教徒はイギリス国教会とカトリック教との違いを考慮し、どちらが真のキリスト教か決めてほしいと言う。

I would to God they [the Catholics] would but seriously consider this one difference between *our* Religion and *theirs*, and which of them comes nearest to *the Wisdom which is from above*, which is *peaceable*, and *gentle*, and *full of mercy*.<sup>99</sup>

"this one difference" とは異なる宗教を信じる人への態度で、カトリック教の場合はプロテスタントへの迫害、イギリス国教会の場合はカトリック教徒への寛大な対処である。イギリスにあってはたとえ国内の宗教と異なる宗教を信奉しても、イギリスは決して彼らを敵視はしない。これがイギリスにおける異なる宗派への基本的な姿勢である。ティロットソンはあくまでもカトリック教とは異なる人間性に富む慈悲にあふれたイギリス国教会の

優位を主張し、イギリス国教会こそがカトリック教に代わり真の宗教と称されうる資格があると言う。火薬陰謀事件記念説教日に神によってカトリック教徒の目が開かれて、カトリック教徒は残酷な精神を人々に吹き込むカトリック教が真の宗教ではありえないことを納得することを願うとさえティロットソンは述べる<sup>98</sup>。異なる宗教を信じる人への残酷な行為はまさしく「残酷な精神」であり、それが如実に露呈されたのが火薬陰謀事件である。ティロットソンのカトリック教徒への態度は決して私憤から来るものではなく、それは「公正な良識」「不公平ではない厳格」からくるもので、カトリック教に欺かれ、そのわなにはまった「惨めにもカトリック教に誘惑された魂」への大きな哀れみと優しさからのものなのである<sup>99</sup>。ティロットソンは、彼本来の人間性からカトリック教徒へは優しく同情的になり、カトリック教徒に対して厳しいところあるとすればそれはイギリス国教会への熱意と祖国イギリス繁栄への懸念からであるといささか自己弁明めいた言葉を述べさえている<sup>100</sup>。ティロットソンの本来の性質からもまたイギリス国民の気質からもまた真のキリスト教であるイギリス国教会の特質からしてもティロットソンは決してカトリック教徒に対しては冷酷にはなりえなかった。ティロットソンのカトリック教への態度は批判的であるが、その批判的態度をティロットソンはイギリス国教会の寛大な性格やイギリス国民の寛容な国民性によって和らげようとしている。ティロットソンがこれらの言葉によって意図するところは、イギリス国教会はカトリック教とは根本的に異なる性格を有するキリスト教であるということである。イギリス国教会はカトリック教と異なり、「敵」に対してすらも残酷な態度を示すことはなく、むしろ「敵」であるからこそ「敵」へ愛情を示すことを忘れることはないというイエスの「隣人愛」を具現する真のキリスト教である。ティロットソンのカトリック教批判にはイギリス国教会のカトリック教への明白な優位が見られるが、ティロットソンは意図的にカトリック教への敵視的態度を緩和しようとしている。むやみにカトリック教を刺激しないようにという気兼ねが彼のカトリック教批判の背後にはあったと思われるが、ティロットソンの説教におけるカトリック教批判には全体的に挑発的な批判とはならず、敵に対して徹底的な憎悪を示す従来の火薬陰謀事件説教とは異なる一面性がある。これまでの火薬陰謀事件記念説教には事件首謀者に対する憎しみ、彼らへの糾弾・弾劾の姿勢が強く反映されていた。説教家は、事件を糾弾することによってジェズイットひいてはカトリック教会の悪辣な実態を暴露し、国民の憎しみをカトリック教へ向けさせ、国内に平和と秩序を取り戻すことを説教の目的とした。その意味では従来の火薬陰謀事件記念説教は幾分扇情的で、カトリック教徒憎しの感情が説教にありありと見られた。何よりも国王暗殺と国家転覆を謀るジェズイットが聖書の様々な類似した事件との比較から徹底的に非難され、王殺害は必ずや実行者に神の天罰が下ると説いていた。ところがティロットソンの説教には聖書からの引用は多くない。ティロットソンの説教には従来の説教家が使用した聖書からのジェズイット批判が全くないかと言えばそうではなく、確かにティロットソンの説教にも聖書の援用からのジェズイット批判はある。ティロットソンが用いたのは「詩編」37章12-15節までと「イザヤ書」8章9-10節である。「詩編」は火薬陰謀事件記念説教ではよく使われた聖書で、12-15節は悪人が受ける運命が失望と失脚であることを記した箇所、「イザヤ書」8章9-10節ではユダヤ王国には神の加護があるからいかなる民いかなる国もユダヤ王国を侵害することはできないことが記されている。「詩編」も「イザヤ書」も神の加護の下にある者にはいかなる者も危害を加

えることができます、危害を加える者は神からの罰を逃れることはできないことを強く述べている。ティロットソン以前の説教家だったら火薬陰謀事件と類似した事件が見られる。「詩編」37章12-15節か「イザヤ書」8章9-10節を説教の冒頭に掲げ、聖書の解釈から始まり、火薬陰謀事件への聖書の適応で終わっていただろう。本来ならばこれが火薬陰謀事件記念説教の定石であった。ところがティロットソンは「詩編」と「イザヤ書」を説教の最後に持ってきて、聖書を援用して火薬陰謀事件を非難することはしない。説教の他の箇所でも説教を援用しての事件の批判を行うことはしない。これは17世紀前半のアンドルーズやバーローやダン等の火薬陰謀事件記念説教と著しく異なる点である。ティロットソンの説教は最後にイギリス国教会への神の祝福、奇跡的救出、及び火薬陰謀事件発覚に対しての神への感謝で終わっている。ティロットソンは、幾度も神が「エジプトの地」「束縛の議会」「カトリック教の暴虐と盲信」<sup>99</sup>からイギリスを解放してくれたことに対して感謝をくり返す。神なくしてはイギリスの危機からの脱出はありえず、火薬陰謀事件を解決してくれたたのはすべて神のお陰であると従来の火薬陰謀事件記念説教と同じ神への感謝を表すことをティロットソンは忘れはしない。従来の説教であれば事件の張本人ジェズイットへ必ずや神の懲罰が下り、ジェームズ一世は神の手厚い保護の下にあるという王への賞賛で終わるところであるが、ティロットソンはジェズイットへの神の懲罰には言及しない。これはやはりティロットソンがチャールズ二世を意識した結果であろう。火薬陰謀事件記念説教においてティロットソンのジェズイット・カトリック教会への批判は見られるが、その批判は従来の火薬陰謀事件記念説教の批判とは幾分異なった批判である。反カトリック教の姿勢が強かったティロットソンと言えどもカトリック教への傾倒を示すチャールズ二世の存在を忘れることはできなかったのである。

#### 4. む す び

ティロットソンが火薬陰謀事件記念説教を行ったのは1678年11月5日であったが、それ以前にはイギリス国内にカトリック教問題が頻発していた。1640-1643年にはカトリック教徒による陰謀の噂、1641年にはアイルランド反乱の勃発し、イギリス国内でのカトリック教徒の反乱の噂、1665年のペスト流行、翌年1666年のロンドン大火、これはカトリック教徒による放火との噂が飛び交う。1672年の信仰自由宣言、1673年の審査法、そして1678年の秋のジェズイットによるチャールズ二世殺害陰謀事件。イギリス人のカトリック教徒への恐怖と不安は一層ボルテージを強めていく。そのような状況のなかでのティロットソンの火薬陰謀事件記念説教である。いやがうえにもティロットソンの説教は注目さに注がれる。カンタベリー首席司祭、陛下直属司祭による説教である。イギリス国教会の司祭がカトリック教寄りのチャールズ二世下の下院でどのような説教を行うかは聴衆の注目の的であった。聴衆は、ティロットソンが火薬陰謀事件を引き起こしたジェズイットへの批判をどのように行うかに関心を抱いたことは疑いない。事件首謀者への容赦のない非難を聴衆は期待したはずである。確かにティロットソンは、事件の計画者であるジェズイットの国会爆破によるジェームズ一世殺害計画を「ルカ伝」9章55-56節のヤコブとヨハネのサマリア人焼却と重ね合わせることによってジェズイットの残虐さを指摘するが、その批判の度合いは期待するほど強くはない。穏やかな説教のトーンはKenyonによっても指摘されており<sup>100</sup>、その穏やかさはティロットソンの「理性的な穏和さ」<sup>101</sup>や「人格からくる静か

な穏和さ」のためであると Davies は言うが<sup>40</sup>、それだけではない。チャールズ二世直属司祭であるティロットソン自身は反カトリック教的な姿勢が強かったが、チャールズ二世の下ではその反カトリック教の姿勢を露骨に表すことはできなかった。それを裏付ける興味深い事件が起こっている。それはチャールズ二世暗殺の噂が広まった1678年の1年前1677年の冬で、形而上詩人の一人であるアンドルー・マーヴェル (Andrew Marvell) が『イギリスにおけるローマ・カトリック教と独断的政府の発展』(*The Growth of Popery and Arbitrary Government in England*) を出版した。そこでマーヴェルは、カトリック教がイギリス政府をカトリック教による暴政へ変えようとする計画とイギリス国教会を徹底的なカトリック教に改宗させる計画についての批判をくり返し、カトリック教の悪意とカトリック教のイギリス国教会への脅威を率直に述べた<sup>41</sup>。更にマーヴェルは英仏海峡でのフランス海軍の侵略を重視し、1673年以來のフランスの私掠船に失われたイギリスの船舶について補遺をわざわざのせ、カトリック大国フランスへの敵意をあからさまに表した。このマーヴェルの反カトリック教の態度は翌1678年に政府内に大きな波紋を投げかけた。印刷業者は投獄され、政府は作者を突き詰めた者へ報奨金まで提供したからである<sup>42</sup>。マーヴェルのカトリック教批判とそれに対する政府の対応が何を物語っているかは明らかである。あからさまなカトリック教批判は身の危険を伴っていたのである。チャールズ二世は1660年に亡命国から帰国したが、その亡命先は言わずとしたカトリック教大国フランスである。1670年に調印されたドーバー条約にはチャールズ二世がカトリック教への改宗宣言を行う秘密項目が含まれており、ルイ14世は民衆の反発を鎮めるための軍事援助の約束までしていた。王のカトリック教徒への寛容政策も相まってチャールズ二世自身もカトリック教徒であるとの噂が流れていた。ティロットソンは反カトリック教的な言動への政府の監視が厳しいことを知っていたはずである。それにもかかわらずティロットソンは火薬陰謀事件説教でカトリック教を批判し、それだけでは止まらず、ティロットソンの反カトリック教は終始一貫していた。ジェズイットによるチャールズ二世暗殺未遂事件の噂が広まるなかで火薬陰謀事件説教を行い、事件の首謀者ジェズイットを批判することはティロットソンに課せられた任務であった。確かにティロットソンはジェズイット批判を行ってはいる。しかし自由気ままにジェズイット・カトリック教を非難することはティロットソンに勇気のいることであった。Kenyon は、ティロットソンは説教を行う前にたぶんチャールズ二世から警告を受けていた、と言っているが<sup>43</sup>、1678年以前のイギリスにおけるカトリック教問題及びチャールズ二世とフランス及びカトリック教との関係を考慮するとKenyonの指摘もあながち荒唐無稽な指摘とは言えなくなってくる。また、チャールズ二世の治世中、説教それ自体は政府公認の場所での説教はよかったが、それ以外の場所での説教には厳しい監視があった<sup>44</sup>。友人の家で説教を行ったために投獄された説教家もいたほどである。1662年の「礼拝統一法」後は説教家はイギリス国教会の教義と規律を主張するようにと厳命されていた経緯もある。政府が説教の内容に介入し、政府に不利な内容の説教には厳しい態度を取っていたのである。チャールズ二世は1672年の「信仰寛容宣言」後、まだ若かりしティロットソンの反カトリック教の説教を聞き、ティロットソンの雄弁な説教を賞賛したが、その説教が国民の間に分裂を助長させる危険があるので説教の出版を禁止したこともあった<sup>45</sup>。チャールズ二世の時代、特にカトリック教徒陰謀事件の間、説教は大衆には大きな影響を及ぼし、人気説教家の説教には聴衆が殺到した。チャールズ二

世自身も説教には正しい趣味を持ち、ただ宗教上の論争は嫌い、アイザック・バーロー (Isaac Barrow) のような学識のある敬虔な思慮深い説教を正しく理解した<sup>60</sup>。ティロットソンの火薬陰謀事件説教は下院で行われたが、もしその説教がチャールズ二世臨席の宮廷で行われたならばそれは下院での説教とは幾分異なっていたであろう。ましてやそれが政府公認の場所以外での説教だったら、ティロットソンの身に何が起こったか想像することは難しくない。チャールズ二世臨席の下だったらティロットソンの説教は王の気持ちを汲み取り、カトリック教への批判も抑制されたものになったであろう。反カトリック教の立場を取っていたジェームズ一世下では、説教家にとって火薬陰謀事件説教は行いやすかった。しかし、チャールズ二世は異なる。チャールズ二世は、ティロットソンの反カトリック教の説教が嫌いで、弟のカトリック教徒のヨーク公に至ってはティロットソンのカトリック教批判の説教に出席するのを止めたほどである<sup>61</sup>。チャールズ二世は反カトリック教の説教には敏感であったと思われる。ティロットソンの説教は下院であればこそ可能な説教であったと言える。説教全般に見られるティロットソンの反カトリック教的立場は明らかであるが、その説教にはまた、チャールズ二世を意識したような発言が見られるのも確かである。例えば、教皇が「反キリスト」であるとの考えに対するティロットソンの態度である。反キリストとしての教皇観はプロテスタントの常套的な攻撃手段であったが、チャールズ二世の下では教皇=反キリストは決して認められなかった<sup>62</sup>。それを知ってかティロットソンは、教皇が反キリストかどうかははっきりとはわからない、と言っている<sup>63</sup>。あるいは、カトリック教徒はもしカトリック教が彼らを妨げることをしなかったならば非情に優れた人になっていただろう<sup>64</sup>とか説教の聴衆がカトリック教徒に対して非理性的な不必要な非キリスト教的な厳格さを示さないようにとか、カトリック教徒にも善人はいたとティロットソンは言っている<sup>65</sup>。またチャールズ二世については「陛下の英知と気遣い」<sup>66</sup>と王への賞賛も見られる。このようにティロットソンはカトリック教徒に対しては批判を繰り返しているが、しかし、説教にはまたカトリック教徒への寛大な態度も見られ、ティロットソンは説教でのカトリック教徒批判には苦勞している印象を受ける。ティロットソンの穏やかな人間性だけでは理解できない複雑な心境がティロットソンにはあった。ティロットソンは、チャールズ二世のカトリック教徒への寛容策から王のカトリック教徒に対する真意を見抜いていた。それがためにティロットソンはカトリック教及びカトリック教徒への批判を徹底することができなかつたのである。その意味で説教家ティロットソンの立場は極めて微妙であった。火薬陰謀事件日における説教からしてカトリック教を批判するのは説教家に要求された当然の義務である。その一方で、カトリック教徒とは公言しないが親カトリック教政策を打ち出すチャールズ二世下では火薬陰謀事件をあからさまには非難できない。反カトリック教か親カトリック教か、これがティロットソンを悩ませた問題であった。ティロットソンの説教そのものは「ルカ伝」9章55-56節を題材として、サマリア人への焼却をイエスに提案する弟子のヤコブとヨハネを批判することから始まり、最後に火薬陰謀事件からの奇跡的な救出に対する神への感謝で終わり、従来の火薬陰謀事件説教方法を踏襲している。17世紀前半の火薬陰謀事件説教にはジェームズ一世の国会演説での火薬陰謀事件への非難を意識した王への追従的な説教が多かった。しかしティロットソンの場合チャールズ二世を喜ばすような説教はできなかつた。もしティロットソンがチャールズ二世に追従的な説教を行えば自らがカトリック教的であるとの噂が広まる。イ

ギリス国教会の聖職者としてそれは決して許されることではない。もしティロットソンが火薬陰謀事件と共に「カトリック教徒陰謀事件」もあわせて説教のなかで扱えば、それはチャールズ二世賞賛の説教となる。国民の反カトリック教の空気が強いなかでそれはできないことであった。それを意識してかティロットソンは説教の直前に起こった「カトリック教徒陰謀事件」には全く触れていない。聴衆からすればティロットソンが両事件について言及するのを期待した者もいただろうが、チャールズ二世の親カトリック教的な立場を考えるとそれも不可能であった。火薬陰謀事件でのカトリック教徒の残虐な行為を批判したティロットソンであれば「カトリック教徒陰謀事件」を取りあげてカトリック教徒を批判することも容易であったはずである。しかし、ティロットソンはあえて「カトリック教徒陰謀事件」を説教の題材とはしなかった。もし「カトリック教徒陰謀事件」を扱えばカトリック教徒を批判しながらチャールズ二世を賞賛することになり、矛盾した説教となる。火薬陰謀事件説教でイギリス国教会の聖職者としてティロットソンはその任務を果たすがカトリック教へ傾倒しているチャールズ二世下ではティロットソンは王の意向に逆らった説教を行うことはできなかった。そこにティロットソンの苦渋があった。ティロットソンの説教全体に見られるカトリック教及びカトリック教徒への「穏やかさ」はチャールズ二世を十分に意識した結果であると言わねばならない。

## 注

- (1) George Clark: *The Later Stuarts 1660-1714* (Oxford: rep., 1972), p. 362.
- (2) 「カトリック教徒陰謀事件」については、Malcolm V. Hay: *The Jesuits and the Popish Plot* (London: Kegan Paul: 1934), John Pollock: *The Popish Plot: A Study in the History of the Reign of Charles II* (Cambridge: At the Clarendon Press, 1944), John Kenyon: *The Popish Plot* (Hammondsworth: Penguin Books Ltd., 1972), 等で詳細に論じられている。
- (3) John Tillotson: *A Sermon Preached November 5. 1678* (London, 1678), pp.2-3.
- (4) Louis G. Locke: *Tillotson: A Study in Seventeenth-century Literature* (Copenhagen: Rosenkilde and Bagger, 1954), p.90. Lockeの書はティロットソンに関する唯一の研究書である。
- (5) Tillotson, p.2.
- (6) Tillotson, p.3.
- (7) Tillotson, p.7.
- (8) Tillotson, p.7.
- (9) Tillotson, p.7.
- (10) Tillotson, p.7.
- (11) Tillotson, p.8.
- (12) J. P. Willson ed. *The Works of Lancelot Andrewes, Vol.IV* (New York: AMS Press, 1967), p.243.
- (13) Tillotson, p.16.
- (14) Tillotson, p.10.
- (15) Tillotson, pp.10-11.
- (16) Tillotson, p.11.
- (17) Tillotson, p.12.



- (18) Tillotson, p.15.
- (19) Tillotson, pp.16-17.
- (20) Tillotson, p.17.
- (21) Tillotson, pp.17-18.
- (22) Tillotson, p.18.
- (23) Tillotson, pp.20-21.
- (24) Tillotson, p.20.
- (25) Locke, p.75.
- (26) Locke, p.99.
- (27) Locke, pp.99-100.
- (28) Locke, p.101.
- (29) Locke, p.102.
- (30) Tillotson, p.28.
- (31) Tillotson, p.29.
- (32) Tillotson, p.29.
- (33) Kenyon, p.102.
- (34) Tillotson, p.32.
- (35) Tillotson, p.32.
- (36) Tillotson, p.33.
- (37) Tillotson, p.33.
- (38) Tillotson, p.35.
- (39) Kenyon, p.102.
- (40) Horton Davies: *Worship and Theology in England* (Princeton: Princeton University Press, 1975), p.181.
- (41) Davies, p.182.
- (42) Kenyon, p.24.
- (43) John Dixon Hunt: *Andrew Marvell: his life and writings* (London: Paul Elek, 1978), pp.182-3
- (44) Kenyon, p.102.
- (45) David Ogg: *England in the Reign of Charles II* (Oxford: At the Clarendon Press, 1955), p.98.
- (46) R. Malcolm Smuts ed.: *The Stuart court and Europe* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), p.240.
- (47) Ogg, p.100.
- (48) *DNB*, vol. XX, p.875.
- (49) John Miller: *Papery & Politics in England 1660-1688* (Cambridge: Cambridge University Press, 1973), p.88.
- (50) Tillotson, p.28.
- (51) Tillotson, p.30.
- (52) Tillotson, p.29, p.30.
- (53) Tillotson, p.34.

References

- Sir George Clark: *The Later Stuarts 1660-1714* Rep. Second edition. Oxford: At the Clarendon Press, 1972.
- Horton Davies: *Like Angels from a Cloud*. San Marino: Huntington Library, 1986.
- Donna B. Hamilton and Richard Strier eds.: *Religion, Literature, and Politics in Post-Reformation England, 1540-1688*. Cambridge: Cambridge University Press, 1996.
- Tim Harris: *London Crowds in the Reign of Charles II*. Cambridge: Cambridge University Press, 1987.
- William H. Hutton: *The English Church From the Accession of Charles I to the Death of Ann (1625-1714)*. Vol. 6. Rep. New York: AMS Press, 1903.
- J. P. Kenyon: *The Stuarts: A Study in English Kingship*. London and Glasgow: Collins, 1967.
- John Coffey: *Persecution and Toleration in Protestant England, 1558-1689*. Essex: Pearson Education Limited, 2000.
- H. R. McAdoo: *The Spirit of Anglicanism*. London: Adam & Charles Black, 1965.
- Michael Mckeon: *Politics and Poetry in Restoration England*. Massachusetts and London: Harvard University Press, 1975.
- W. Fraser Mitchell: *English Pulpit Oratory from Andrewes to Tillotson*. London: Society for Promoting Christian Knowledge, 1932.
- H. D. Traill and J. S. Mann: *Social England*. Vol. IV. Rep. New York: Greenwood Press, 1969.
- G. M. Trevelian: *Illustrated English Social History*. Vols. One and Two. New Impressions. London: Longmans, 1962 and 1964.